

ウェスターマークの社会学における

道德觀念の起源

戸 頃 重 基

目 次

- 一 小 序
- 二 ウェスターマークの道德社会学史的地位
- 三 ウェスターマーク社会学説の特色
- 四 道德的觀念の情動的起源
- 五 未開人の復讐感情と道德
- 六 結 語

一 小 序

本稿はウェスターマーク Edward Alexander Westermarck, 1832~1909 の不朽の名著、「道德觀念の起源と発展」(vol. I, 1906, vol. II, 1916) をてがかりとして、かれの道德社会学に関する考察の成果を要約した試論である。しかし道德哲学、民俗学、社会学、人類学、歴史学、および倫理学などの諸科学を博大な展望の中に収約する本書はじつにA版上下二巻一五八一頁におよぶ大冊でありとうてい、その問題領域全般の考察はここではゆるぎされない。それゆえ今はただ前記目次にかかげた程度の課題に限定してウェス

ターマーク道德社会学の輪廓を叙述するにとどめた。

一 ウェスターマークの道德社会学史的地位

ウェスターマークはフィンランドで生れ、英国で大成した学者であり、その専攻は社会学と人類学であつた。ヘルシングフォールス大学卒後、母校の教授となつたが、一九〇七年英国に移住、ロンドン大学の社会学教授となつた。著名なホップハウス、L. T. Hobhouse, Seebohm は彼の同僚である。ウェスターマークはホップハウスと同様、社会学者としての立場から道德問題に多くの学問的興味を寄せていたが、それを解明する方法も人類学的であつたという点で両者共通である。「道德觀念の起源と発展」はちやうどホップハウスの「道德の進化」Morals in Evolution, 1906 と相前後して公刊され、共にダーウィン主義の決定的感化の下に立つている。ホップハウスはウェスターマークの本書が公刊されたとき「人類の慣習の詳細な展望にもとづく道德觀念の發生に関する最初の包括的体系的な決算」といい、また、「一般社会学の研究における一新紀元の始まりを

記す」ともいつて激賞のことばを惜しまなかつた。これはしかしホップハウスのたんなる私情からでた評価ではない。「道德觀念の起源と発展」が當時西欧の社会学界において、高い評価の対象に細いたことは、オッペンハイマー F. Oppenheimer, 1864~1935 が「ウェンスタマーの著書は社会学の出来事を意味する。すなわち、ウェンスタマーは深奥な民俗学的知識を秩序ある悟性によつて老巧に支配し、また鋭い批判と足跡堅固な心理学によつて説明している。もし、人類婚姻史が始めて人間の共同生活の最も困難な領域を解明せる書として社会学の標準的業績となるならばこの第二の有力な著書は長く人間の生成する科学の礎石となるであらう」といつたことばを傍証に引用してもいい。あるいは、マレット R. Marett, 1866 が、「ウェンスタマーの著作は深い賞讃をもつて私の心をみたす。これほど大がかりなスケール、權威的な方法で道德の進化に具体性を附与するいかなる著作も存在しない」といつた評語を追加すればじうぶんであらう。

「道德觀念の起源と発展」が十九世紀、英國の廻ける学問的成果の金字塔であることははや疑いのないところである。それにもかかわらず本書はこれまで日本の倫理学者の全く注意をひかない古典であり、ただわずかに社会学者がその名を紹介するにすぎなかつた。同一著者の「人類婚姻史」The History of Human Marriage, 1891 はモルガン L. H. Morgan, 1818~1881 の原始結婚説の独創的批判の書として著名であるにもかかわらず、「道德觀念の起源と発展」は社会学者の研究意欲の魅力ある対象とされることもなくこんにちまでに、およんでいるのである。学説上、反駁の相手となつたオス

ンダの人類学者、シュタインメッツ S. R. Steinmetz もモルガンの名目にははるかおよばない。がこれは狭い日本の学界だけの現象であつて、このことは本書の道德社会学的意義を少しも減ずるものではないのである。

十九世紀は近世にたいする反省の時代であるといわれるが、二十世紀は同様、十九世紀にたいする批判と懐疑の時代である。「道德觀念の起源と発展」が世に問われたのはまさに二十世紀の初頭であるが思想の骨組みと血肉のすべてはこれを十九世紀の英國の学問的遺産からうけつた。自然科学的觀察の道德問題への無制限の適用と解釈はいわば思想家としてのウェンスタマーの限界を不可避的に立証する。また未開社会の研究に生涯のエネルギーを消耗したかれは道德と民族、道德と階級のような現代の問題に臨みる余裕をもたなかつた。そればかりでなく未開社会の慣習と道德の関連を示す事実の記念すべき蒐集において主観的心理学につよく支配され、資料の焦点を誤解するばあいも稀ではなかつた。近親婚の禁止に關する心理的解釈のごときその一例であるが、同様の欠陥は「道德觀念の起源と発展」の中でも幾い難い露頭となつて読者の眼前に浮び上る。したがつてこの社会学者に英國倫理学史の系譜の中での地位をあたえたとすれば A. スミス、D. ヒューム、F. ハチスン、E. シヤフツベリなどの感情倫理学 Ethics of Feeling, or Feeling-ethics に近い坐標を占めることにならう。近いといつたのはウェンスタマーが道德的情動を重視したにもかかわらずこれらの直覺説 Intuitionism に共鳴しえなかつたからである。

ウェンスタマーによれば社会的に賞讃せられたものは倫理的に

善であり、応報的な好意の一種である。反対に倫理的憤怒が支配するところのものは悪である。だから道徳は社会的起源をもつ道徳的感情に依存する。社会は道徳のゆりかごであり、最初の道徳的判断は個人の人格感情ではなく、全体感情を表象した。公衆の怒りは道徳的非難の原像であり、その賞讃、感謝は道徳的承認の原像である。

社会人類学 *Social Anthropology* をウィスラー、ラディンと共に提唱したウェスターマークはかくて倫理学的な道徳情操論ではない。この観点に立つており、たんなる個人倫理学的な道徳情操論ではない。しかし、かれがづとめて反対する倫理思想は、カッドオース、クラーク、ブライスおよびリードなどによつて典型的に代弁せられていく知的直覚主義的な永久道徳論であつた。かれに、「倫理的相対性」 *Ethical Relativity*, 1932 の著作があるのは社会学者として当然のことである。一般に永久道徳の思想は神学もしくは形而上学によつて演繹せられるのが普通であり、反対に自然科学または社会科学を方法とすれば相対道徳論が必然の帰納的命題とならざるをえない。しかし、われわれはウェスターマークの「道徳觀念の起源と発展」にたいして、倫理思想的意義をもとめるならば期待はずれとならないまでも、おそらくその思想体系の平凡さに気づくであらう。前述したようになれば好んで道徳問題をとりあげたけれどもそれは社会学者、あるいは人類学者としての立場からであつて、哲学者、倫理学者としての立場からではなかつた。A・スミスは「国富論」によつて経済学史上の古典的地位をゆるぎのないものとしてゐるが、「道徳情操論」の倫理学史的評価はそんなに高いものでありえない。同様に、ウェスターマークの、「道徳觀念の起源と発展」は道徳社

会学史の画期的名著であるにもかかわらず、それが占める十九世紀あるいは二十世紀初頭の倫理思想史的地位は群立する思想家を凌駕するほどのものでありえないであらう。したがつて本書の評価はあくまでも社会学の観点からなさるべきである。

ウェスターマークといへば一般に学者はモルガンと対照的に、「人類婚姻史」の業績のみを回想し易いが、「道徳觀念の起源と発展」もまた社会学の観点から前者に劣らぬ精力的な事業の不滅の結果とみなされなければならない。本書においてウェスターマークはモロッコ（アフリカ北西部のフランスおよびスペインの分領地）におこなわれている慣習と觀念との關係について観察しその關係が道徳的意見と呪術と宗教的信仰の緊密なる事実を見て、非ヨーロッパ人の民習 *Folkways* に関する直接的知識を要求することが有効であると考へ、自己の研究領域として選定したモロッコに四年間、土民と起居を共にし、たんに人類学的な資料を蒐集したばかりでなく、自分からも進んで土人のものの考え方に精通しようと努力した。そしてヨーロッパ文明と全く異つた文明の段階においてあらわれる未開人の種々の慣習の科学的理解を、ヨーロッパ的な優越的偏見ぬきでものとつとめたのである。本書の中には有名無名の種族が登場してゐるが、ウェスターマークの親しく調査した未開人はモロッコ族——*Marriage Ceremonies in Morocco, 1926, Ritual and Belief in Morocco, 1921* はいずれも、ウェスターマーク晩年の著作である——ぐらいで他は多く間接的資料の助力に負うてゐる。

一般に道徳社会学といへばこれはデュルケーム *Emile Durkheim*, 1858~1917 の提唱に始まり、その豊かな結果は同じくデュル

ケー学派によつてもたらされたが、だからといつてウェスターマーにフランス道德社会学の感化の足跡を確めることは無益であらう。「本書を通じて読者は容易に私がいかに多く英国の科学と思想に負うてゐるかを知らるであらう」とかれ自らも述べてゐるように、ウェスターマーク道德社会学の背景はフランス的でもドイツ的でもなく、じつに歩きながら考える英国固有の思想的態度である。したがつてかれの社会学は適切な知識と正確な方法と綜合的な傾向をもつ英国の特殊社会学の歴史的発展の一記録であるといつていい。

註

(1) ウェスターマークの、「道德觀念の起源と発展」にたいするホップハウス、オッペンハイマー、およびマレットの書評は一九一六年九月刊行（ロンドン）本書第二卷々末に転記されてある。Some Press opinions on vol. I からの拙訳による。

(2) C. Wissler, P. Radin は共にアメリカの著名な人類学者。社会人類学を文化人類学と同視する点でウェスターマークはかれらと共通の見地になつた。ラディンは歴史的傾向の強い人類学者であるが、ウイスラーは歴史を重視するばかりでなく、道具をつくり、社会関係を組織化し美術を創造する原動力として human germ plasma を想定せねば各民族の文化様式の差異は説明できなかつた。P. Radin, Method and Theory of Ethnology, 1933, C. Wissler, The Relation of Nature to Man in Aboriginal America, 1936

(3) A. Smith, Theory of Moral Sentiments, 1795

三 ウェスターマーク社会学説の特色

ウェスターマークをふくめて一般に英国の社会学は論理よりも実験を、概念よりも事実を重んずる特徴を伝統的に身につけており、この特徴は緻密な方法論的思弁によつて実証の貧困を補足するドイツ社会学とまさに対照的である。深刻な思索よりも平明な常識を好むのが英国人の伝統的な氣質であるといわれているが、ウェスターマークの社会学においてもその特色は豊かな民俗学的、人種学的な調査もしくは間接資料にもとづく適確な常識的判断の提出の仕方の中に発揮せられた。ただウェスターマークの社会学について注意を讀者に喚起したい点はいかがが功利主義 Utilitarianism に第二義的な意味しか認めなかつたことである。けだしかれは未開社会の広汎な研究をとおして集団にたいする個人の犠牲や献身が普遍的な道德的事実であることに精通していたからである。かれの社会学的倫理思想の立場は没我的な集団主義にあるといえるであらう。

集団といへばウェスターマークはスイスのバホフエン J. J. Bachofen, 1815~1887 ドイツのミューラー・リーア F. C. Müller-Lyer, 1867~1916 などとともに、代表的な家族社会学者の一人としてあげられている。したがつてウェスターマークにおいては家族の社会学的研究をとおして家族の道德、とりわけ婚姻の道德が重要な比重を占める。いわゆるかれの原始婚姻説 The theory of original pair marriage によれば人類の最も原始的な結婚の型態は一男一女間の暫時的な不安定な結婚であつたが、けつして乱婚ではなかつた。この説は第一に類人猿の間にさえ一雌一雄とその子からなる小

家族が見出されること、第二に動物や人間には嫉妬感情が根ざしていること、第三に人類はその出生において男女がほぼ同数であり、したがって単婚が可能な唯一の結婚制度でありえたことなどを理由とする。けれども原始単婚は夫婦関係が一定の期間だけ継続し、夫婦どちらの側からも自由に解消できるといふ点で、まさに現代の一夫一婦婚と区別されなければならぬ。ウェスターマークは現在多婚制のおこなわれているばあいでもかつて単婚がおこなわれたことが論証されると主張して、モルガンの原始乱婚説に反対したのは周知のとおりである。⁽¹⁾ここでモルガンなどのいわゆる乱婚制とは無秩序な性交制のことであつて、すべての女子はすべての男子に、すべての男子はすべての女子にぞくする状態を意味し、低度民族および歴史上の古代民族の血族や氏族における血縁関係とその呼称方法から推論したもので十九世紀の中頃から主張されるようになった。ところでこのような原始乱婚制がもし存在したものと仮定すれば、原始の単純な小家族はどうして食物を獲得し効畜を養育しえたかが疑問となるし、人畜にみられる嫉妬感情がはたして絶対的乱婚の横行を可能にしたかどうか疑わしい。モルガンの統一的婚姻進化図型すなわち「乱婚制—群婚制—妻多夫制—一夫一婦制(単婚制)」は進化論の公式的適用に隨して「原始人」といふべきに未開野蛮な知性、道德ないし制度しかもちえないとする文明人の偏見に支配されたものである。しかしモルガン以後、未開社会の研究が進むに従ひ最近の人類学者、社会学者は無制限な原始乱婚制を一般に否認する傾向にあり、したがつてウェスターマークの社会学説の主観心理学的解釈的方法的過誤はともかくとして原始単婚説は結論的に、現代の支

持に値するわけである。ウェスターマークが社会学説の問題として婚姻制を重視したのは性的自然 *sexual nature* というものが道德と密接な関係に結ばれている事実への觀察に依存する。かれに、「性の諸問題」(一九〇六年)という著作のあることはあまり知られていないが、「道德觀念の起源と発展」の第二巻のなかでも、「人間の性的自然はそれにおいて道德的判斷が看過されている行為の種々なる型態を提起する。われわれは婚姻なる項目のもとに包括されてあるものとして性と道德との關係をまず考察しなければならぬ」といつて婚姻と道德の關係を詳細に論究している。⁽²⁾

原始単婚説についてウェスターマーク社会学説の特徴をなすものは族外婚 *Exogamy*、および集團婚 *Group Marriage* の成立原因に關する學說である。族外婚はまた外婚制ともいい、内婚制 *Endogamy* にたいする名稱であつて、配偶者を家族や部落など自己の所屬する団体の外から選ばせる慣習である。このような慣習の成立についてウェスターマークは少年時代から共同生活を営んできた人間の間に性的刺激が発生しにくいこと、すなわち原始種族の共同生活をその原因とみなし、デュルケームと對照的見解にたつ。デュルケームによれば全般的な宗教的體系であるトールテミズムと不可分離の氏族社会にあつて族内婚はタブー(禁忌)であるがゆゑに婚姻はすべて族外婚たらざるをえなかつたとみるのである。⁽³⁾族外婚の成立に關連してウェスターマークは母系氏族の先行性が一般的に確定し難いものであつて未開人の社会に全くその痕跡の存しないもののあること、また母系と母權の關係にしても、兩者が相互隨伴するばあいもあるが、ウェスターマークは兩者を一応、區別してとりあつた

べきことを主張した。血族的に母系支配の社会において母権の成立が最も自然に想定されるが、ウェスターマークによればそれはたんなる想定にすぎないのであつて、なんら一般の原則となりえない。けれど、実証的には母系の社会においても父権の成立しているばかりありうるからである。

集団婚(団体婚)とは一団の男子と一団の女子との婚姻を意味する。部族社会では一夫一婦の婚姻型態は制度的に確立されずたゞ事実的に漸次、この傾向が強化されつつあつたものと考えられるが、社会の特殊の事情によつて集団婚の型態が成立したものとみられる。オーストラリアのディエリ族のピラウル婚 *pirauru marriage* がその典型であつて、これは兄弟が妻を交換する慣習である。甲の第一の妻は甲にとつてティツパマルク *Tipamalku* であるが、乙にとつては第二の妻ピラウルをなし、同様に乙の第一の妻は乙にとつてティツパマルクであるが甲にとつては第二の妻ピラウルとなる。このような形式において一人の男子は多数のピラウルとしての妻を、一人の女子は多数のピラウルとしての夫をもつ。この婚姻型態は多元的であるが集団婚の名称が指示するような広範のものはない。原始乱婚制を肯定するものは広範の集団婚がかつて存在していたものとみなしこれを乱婚からの進化的形式であると解釈したが、ウェスターマークはその解釈を否認する。ウェスターマークは女子の相対的少数と老人の自我的専制が集団婚の成因とみるものであつてこれは同じ原始乱婚を否定する *W. Wundt, 1832-1920* が、嫁娶婚と結びつけて集団婚の成因を解釈した見解とも異なる。ワントは嫁娶された女子が嫁娶者の妻となると同時に嫁娶の協力者になり

してピラウルとなつたところにその成因があると考へたのである。(6)

註

(1) 原始乱婚制 *Promiscuity* を主張する学者はモルガン外に、*ヘンリマン J. E. Meleman, 1827-81*、*バートン J. J. Bachofen, 1815-87*、*エンゲルス F. Engels, 1830-95*、*リッペルト J. Lippert, 1839-1909*、*ス宾ナー H. Spencer, 1820-1903* の名をあげることができ。

(2) *E. A. Westermarck, The Origin and Development of the Moral Ideas, vol. I, p. 364*

性と道徳の關係について能登の拙倉島にのこる古代民俗は興味がある。ここでは性に關係した問題は父子の間ではタウーになつていて婚をせぬ習慣である。息子に嫁をとらうとする時、父親は直接、息子に話しかけないで、息子の友人を通じて相談しなければならぬ。父親のばあいは娘のはなしをしてもかまわないが、これは日本民俗がもつていた古い道徳をいまだに伝えている民俗学的資料である。一般に近親者で性の問題にふれないのは現代でも都郡を通じてみられる共通の習慣であり道徳である。子女にたいする両親の性教育の困難なゆえんはそのような習慣や道徳の圧力も加わつてゐるからであらう。

(3) *E. Durkheim, La Prohibition de l'inceste et ses origines (L'Année Sociologique, T. I 1898, pp. 70)*

(4) その例として *マウアンキエリート Avunculate* の制度が知られてゐる。これは、母系的な組織において子供にたいする権

威が母系的な母の兄弟にあるばあいであつてこれは母系社会における男子の権力的優越を示す。だから母系と母権とは必ずしも一致しない。しかしたんなる母系となればその分布はじつに広汎である。日本でも招婿婚（ムコ取式）という原始社会の母系婚は太古から南北朝に及ぶ久しい期間、支配的な婚姻型として存続した。高群逸枝著、「招婿婚の研究」巻照

(9) 群族社会にあつて、家族が存在し乱婚的でなかつた一例としてヴェネツ族の社会があげられる。

(10) 探察婚の説も乱婚説同様こんにちでは一般に支持者を失つてゐる。それにかわり交換婚説が有力である。

四 道德的概念の情動的起源

「道德的概念はけつきよく憤りか、さもなくば承認の、そのいずれかの情動にもとずいてゐる。このことはある思想家の学派が無益にも否定しようとしてた事実である」と、ウェンスタマーは「道德概念の起源と発展」第一巻の勢頭⁽¹⁾に記してゐる。善 good 悪 bad 正 right 不正 wrong などのいわゆる道德的概念 moral conception はウェンスタマーによればならぬ知的反省的な判断内容を表示するものではなく、情動 emotion の直接的表示にほかならない。情動とは生得的にまたは経験的に特殊の興味をひくある対象または出来事の知覚、あるいはその想起が著るしい感情興奮とそれにとまらざるしい身体的活動を生ぜしめ、それらが一定の経過状態をとつて終熄または他の精神状態に移行する精神過程をいう。このようなものとして喜、怒、悲、恐怖、愛憎、憂悶、心配、希望、

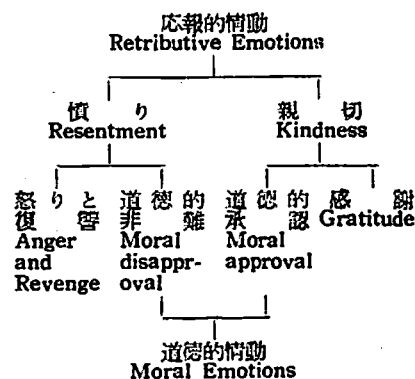
驚愕などが情動としてあげられる。われわれは心のうちにおこる情動によつて行為の善・悪・正・不正を声明し、それらは感覚によつて陽光は暖かで水は冷たいよぶのにも譬えられるであらう。われわれがある事物を善とよぶのはそれを善と感ずるからであり、快とよぶのはそれを快と感ずるからである。ある対象を暖とか快とかよぶことによつてそれが熱の感覚、あるいは快の感情を心のうちに産出するにふさわしいことを主張しているようにある行為を善、あるいは悪とよぶのはけつきよく判断を表明するひとの心のうちに承認あるいは不承認の情動を行為が惹きおこすことを意味する。このように道德的概念はウェンスタマーによれば道德的情動を喚起する現象の傾向を本質的に普遍化したものであり、したがつて道德的判断 moral judgment の起源はその判断を表明する情動——それは、一般性 universality、あるいは客観性 objectivity を占有する——にまで遡及することができる。しかし、ウェンスタマーは道德的判断の起源となる情動は individual emotion ではなく、public emotion でなければならぬことを主張し、ステファン・ペンタム、および J. S. ミルの倫理学の前提となつてゐる情動の功利主義を批判した⁽²⁾。さて前述のごとく道德的概念が情動に依存するということは道德的判断が真理や知性に全く無関係であることを意味するものではなく、心の外部にある真実在はただ知性によつてのみ決定せられるということである。快樂、苦痛、満足、嫌惡などの印象が徳 virtue や不徳 vice の知覚を結果としてもなうことがあるように知性による決定が情動を同伴することも真実である。「道德的判断に及ぼす知的な考察の影響はたしかに深大である。われわれは道德意識の

進展が非常に無反省から反省への、蒙昧から啓蒙への発展の中に存するということを知るであらう。あらゆる高級な情動は認識によつて決定されたものであり、それらは決定的な客観的条件の表象から生じたものである。また道德的啓蒙はこれらの客観的条件の真なるそして理解力をもつた表象を包括してゐる」。しかし、認識の起源を経験論的に説明する英国思想の伝統にたつウェンスタマーは知性の役割を認めてもこのことによつて印象が知覚の結果の随伴物であることを否定するものではなく、したがつて、直覚論者の主知主義的道德論にけわしく反対した。⁽³⁾

前に道德的概念の起源となる情動はたんに個人的なものではなく公衆的なものであるといつた。ウェンスタマーはいう。「社会はそれにおいてひとびとが正邪を区別することを学ぶ学校であり、校長は風習であり、そして教科目はそれにもかかわらず風習なのである。最初の道德的判断は世論 public opinion によつて表明せられた。公衆の憤り public indignation と、公衆の承認 public approval とは道德的情動の原型である」と。憤りは静的非合理的世論であるが、世論と憤りを全く同一視して考えるウェンスタマーの所論にわれわれはかならずしも賛成できない。討議を通じて形成せられる世論には動的合理的要素をふくんでいるからである。それにしてもレヴィーブリュール Lévy-Bruhl, 1857~1939 のいわゆる「風習の科学」はウェンスタマーの、「道德觀念の起源と発展」においてもすぐれた一つの結実を見出したといつていいのである。

ウェンスタマーの、「風習の科学」の対象は他の多くの社会学者もそうであつたように、未開社会であつた。憤りが一切であると

いつもいい未開人の社会にあつて、個人の自由なる意志を表明する結果にもとく意見の相違は存在せず、したがつてかかる憤習と全く未分化の状態にある道德的判断は一つの客観的意義をもつ。ウェンスタマーは道德的判断の起源となる道德的情動を未開社会の憤習を研究することにより次の隨時に要約した。⁽⁴⁾



れる。『復讐』には敵意ある反動 hostile reaction が多少なりとも理由や打算によつて拘束せられている。⁽⁵⁾しかし、『怒り』と『復讐』の間に限界線をひくころみは慾望が苦痛を課するばあいと同様、全く不可能である。それゆえ両者を『憤り』の情動のうちに内含させるならば『憤り』はまた道德的非難とも不可分離である。なぜなら、不正や悪にたいする道德的非難にはつねに『憤り』がふくまれているから。正義の怒りとか義憤というのはそれである。がこ

以上のうち『憤り』は苦痛の原因にむけられた心の攻撃的態度であつて、かかる『憤り』が急激に生じ、苦痛の原因にたいする敵意ある反動が思慮によつて拘束されておらないものを『怒り』とよぶ。これと反対に思慮をもつた非道德的憤りは『復讐』とよば

の「憤り」のうちには道德的に承認せられたものの「親切」や「感謝」がある。かくて道德的情動としての道德的承認には「親切」が、道德的非難には「憤り」がそれぞれ応報的情動として対応する。しかしこれらの道德的情動および応報的情動はウェンスタマータによればすべて公衆的なものであつて、それは具体的に制度とか風習とよばれる客観的拘束のうちに結晶しているものとみるのである。

註

- (1) Westermarck, *op. cit.* vol. I, pp. 4
 - (2) ウェンスタマータによつて引用された功利主義思想家の文獻には次のようなものがあげられてある。
 - Bentham, *Principles of Morals and Legislation*, 1789.
 - J. S. Mill, *Utilitarianism*, 1863
- しかしウェンスタマータは功利という単純な原理によつて規定できないものとして人間の情動的・感情的構成 (emotional constitution) をあげる。われわれは、道德的評價の質にとられて、量をしはしば超過する。善と悪との間には程度の差違があり、義務には寛赦の、報酬には多少の差があり、この量的差異はあらゆる道德的概念の情動的起原に歸せられる。情動は強さにおいて殆んど無限に変化するが道德的情動もその例外ではなくしたがつて、道德的概念は単一に情動の無限の量的変化を包みえない。
- (3) Westermarck, *op. cit.* vol. I, p. 9-10
 - (4) ウェンスタマータにより引用せられた直覚論者とその著

作。Price, *Review of the Principal Questions in Morals* 1776; S. Clarke, *Discourse concerning the unchangeable obligations of natural Religion*, 1708, etc.

- (5) Westermarck, *op. cit.* vol. I, pp. 9
 - (6) Lévy-Bruhl, *La morale et la science des mœurs*, 1900
- レヴィ・ブルネルにおいて道德社会学の名称は「道德および風習の科学」という名称にかえられた。かれによれば、道德を構成したり、またそれを演繹することは道德科学の目的ではない。かれにとつて理論道德にかわるべきものは社会的実在に関する実証的科学的建設である。この観点に立つと、理論と技術は峻別され、したがつて規範科学としての倫理学は存在しないことになる。拙著、「社会学の倫理学」・（昭和二十八年六月・理想社発行）第三章第五節・フランドスの道德社会学・参照
- (7) Westermarck, *op. cit.* vol. I, pp. 21
 - (8) Ribot, *Psychology of the Emotions*, pp. 220, sq., 1896

五 未開人の復讐感情と道德

ウェンスタマータは未開社会の研究を行うにさいし、つねにオランダの社会学者、G. R. シュタインメッツの所説を引用し、それを批判するところから論旨を展開してゆく。いまここにその一例として未開人の復讐と道德の関係についてみると、シュタインメッツは未開人の復讐感情が本質的に力と優越の自己感情であるにもかかわらず識別力の欠乏により、そのいわゆる復讐が一定の方向をもたず無差別になされるという解釈をとり、無方向無差別な未開人の復讐

感情が近代的な連帯責任へ発展するところに文明人の刑罰の觀念が成立したものとみる。復讐が敵の自尊心を挫くことによつて自己の劣等感を除去し、また悪を禁ずる最善の手段が不当行為者を処罰するにあると考える点で未開人も文明人とおそらく異なるものでない。

しかしシュタインメッツはこのような共通点を無視して進化論的に両者の區別を主張し、未開人の復讐行為の無差別性と道德觀念の原始的野蠻性を文化人的観点から指摘する。もちろんこれには立論の裏づけとなる未開人の種々の復讐の慣例がないのではなかつた。たとえば、ダゲスタン族ではひとの死亡にさいし死因不明のとき、故人の親族はたれか別人にいがかりをつけて殺害の復讐をころみる。ニューギニアの土人の間では不吉の知らせを持参したものはその通知を受けとつた人から怒りのつづく間、頭をなぐられる慣習がある。マレー土人のなかには敵味方の見境もなく攻撃を加える風習がある。このような実例をあげてくると、シュタインメッツが未開人の復讐感情を識別力なき無方向の非道德的情動と解することにも全く理由のないことではない。

しかしウェスターマークはシュタインメッツの未開社会の民俗学的見解に反対する。モルガンの原始乱婚説が進化論の公式的な乱用にもとづく文明人の一種の偏見であつたように、シュタインメッツもまた同様の偏見を犯しているわけである。一般に文明人は未開人についてなら直接経験をもつていないのであるから、未開人の知性を簡単に混亂せしめると判断できないはずである。モロツコ人と四年間にわたる共同生活を通じてウェスターマークはかれらの思维様式に慣れることによつて、こんにち一般未開人とよばれているも

のでも、その物心両面の生活にわたり、文明人の予想するほど未開人の素朴な原型を保存していない事実を発見した。それと同時に文明人の中に子々孫々、原人の特徴的な性格がうけつがれていることは重要な観点として選びだされなければならないとした。「人類は大きく変化をとげたが原人はすべて死滅したのではない」「私は未開人の復讐がはじめは本質的に無差別であつたものが社会的便宜を考慮して漸次、差別的になつたと今もなおたれかが信じているのを見出して意外に思うものである」とウェスターマークは在来の見解に不信を表明している。もちろん、かれがこのようにいうことは未開人の復讐がつねに恩恵分別をともなつた計画的行為であることを承認するものではないが、重要なことは未開人の復讐が多く犯罪者の知られていないときに限られている事実である。文明人の常識からみて復讐をうけたひとが復讐に値するか否かではなく、犯罪者の不明に関する意識的事実である。したがつて前例、ダゲスタン族やニューギニア土人の復讐行為のばあいでも、前者は死因について、後者は凶報の直接原因——このばあい、頭を叩かれたものが悲しみや憤りをひきおこした直接原因とみなされた——についてかれらなりの感覚をもつている以上、undirected vengeance であるということとはできない。この実例と反対に復讐が明確な方向意識をともなつていふべきは、たとえばブラジルのツピス族が有害な鳥獣を食ひ、足にぶつかつた石を噛み、タキ族が頭上に倒れた木をズタズタに切り刻む風習によつて証示できる。

復讐は突発的な怒りにともなる憤りのあらわれであり道德的情動の重要な要素である。たしかに怒りは目的物にたいしてばかりでな

く、偶然邂逅する障害物にたいしても無差別に向けられるばあがある。このようなものとして怒りはそのまま道徳的情動ではありえない。ところが怒りを無罪なるものの正義と安全の防衛のために自然が人間または動物に与えたものと解するならば、そのとき怒りははじめて道徳的情動となるのである。

惡にたいする憎しみと、不正にたいする正義の怒り righteous anger のないところに道徳意識はない。ハートレー D. Hartley, 1704

が憤りと感謝とが道徳官と奥深く結合していることに留意したゆえんである。『憤り』はまたたんなる情動の発作ではなく、その真の目的は苦痛と危険の原因を撤去することにあるから、『憤り』の攻撃を意に介しない種族は進化論者の主張によれば後退もしくは滅亡をまぬがれない。H・スタンレーは復讐の望を恐れるアフリカの倭人の例を引用して復讐の強い種族ほど自己保存と繁栄に成功的であることを観察した。同じことは動物生活についてもいうことができる。動物の復讐感情についてウェスターマークはダーウイン、ロマンシズ、ブレイム、レンガーなどの研究成果を忠実にうけつぎ、シュタインメッツが復讐をたんに人間固有の行為とする所説に反対した。

希望峰において役人がある群々を苦しめると、その群々は日曜日などに役人の通りそうな道路に待伏し、彼の姿をみつけるや否や穴をつくりそこへ水をそそぎ大急ぎで泥のかたまりをつくつて器用にその役人めがけて投げつけ、命中すると、とび上つてよろんだというようなことがダーウインによつて述べられている。『動物の知性』 Animal Intelligence, 1883, 1892-95, の著者、ロネス G. J. Romanes, 1848-1894 はこれを動物の憤りに発する復讐の奥例と

みなした。そのほか侮蔑には敏感であるが無害と知ればたとい混乱した事情のもとでも人を害するような怒りをけつしてあらわさない象の例をわれわれは容易に知るであろう。また、檻の中の豹が棒切れでいたずらされると、棒切れでなくそれをつかむ人間の手を直接ひつかこうとする光景も珍しくない。

「われわれを憤激させる大部分の事柄は侮辱であつて損害ではない」といつたのはセネカである。英領コロンビアのインディアンは自己感情が害せられると数日間食事もとらず坐つたり横になつたりして最初に思いつくのは自分が敵に優越していることを示す仕方であるといわれる。これは憤りから生じた復讐感情とかならずしも同一でない。なぜならば力または優越の快感は復讐感情の如く排他的でないからである。しかし慾望の満足が快楽を随伴するように、復讐の満足もそれ自身に快感をあたえるから両者を抽象的に区別するのは正しくない。要するに、復讐とは苦痛の原因に向う攻撃的態度によつてつくられた精神的状態であるということが出来る。これにたいし復讐を惻徳として斥けたカントは、「復讐は和解を目指さない。それはわれわれの權利を傷害したものに禍と苦痛とが加えられることを一途に願望する」行為と規定している。

未開人について普通いわれることは、かれらが「個性の感覚」 sense of individuality をもたず、したがつてそこでは集団が一切であるということである。ウェスターマークは血族復讐 blood-revenge をその奥例としてあげる。これは集団の全成員が復讐を結果的に有効にするためと、また相互の安全を目的とする。ウェスターマークはこの血族復讐が日本人、朝鮮人、ベルシャ人、インド人、古

代ギリシャ人、およびチュートン人の間でひろくおこなわれていることを指摘している。ところで血族復讐の倫理的な支えは連帯責任 collective responsibility にもとめられる。英領コロンビアおよびヴァンクーバー島のインディアンの間では遺恨は世々代々、父から子につたえられ、したがって遺恨を買う血族は復讐され終るまで実在する危険から放免されない。またグリーンランド人の間では殺人にたいする復讐はその殺人者の子供、いとこ、その他の親族の生命にまでおよぶのである。

同様に未開人のばあい義務は祖先伝来の慣習によつて個人に課せられておる。フオスターがチエロキ族（もと、米国ジョージア州北部およびその附近山地に住み、今、オクラハマに住む一派の北米土人）の一土人に正と不正の区別を質問したところ、かの土人は正しいこととは他の種族、あるいは白人から馬を盗むことであり、不正とはその盗みが自分の種族にたいしてなされることであると答えたという。義務はだからかられらにおいて全体の強制的規範に無条件に服従することなのである。集団の個々成員は集団全体の利益と安全のためには掠奪はもちろん殺人すら辞せない。全体が個人にたいして慣習に逆うことを極度に厳禁するのは一般に未開社会の特色であるが、そのばあい慣習は未開社会においてそれ自体、道徳律であり、法律であり、そしてしばしばタヴァー（禁忌）を孕むという点ではまた宗教でもあるのである。

未開社会の連帯責任は族閥制 bloodland のうちに典型化されている。たとえばフューギアンの間では殺された人の全親族は加害者のあらゆる姻戚関係の個人個人にその怒りを仕返しするし、グリー

ンランド人の間では殺人にたいする復讐において、もし加害者の不明な時は加害者の知人のたれかを犠牲とする。復讐の対象となる親族に明確な限界を意識するものはユーフラテス河畔のベドウィン人であつて、かれらは加害者の親族を殺すばあいでも、二親等外にその範圍をひろげない。マリヤ人の間では平民が貴族に殺されると、復讐は加害者たる貴族に直接向けられるよりは貴族に仕える平民の上に向けられる。それと反対に貴族が平民によつて殺されると、殺人者は不問に付せられるという慣習もある。イゴロト族の間ではひとりの男が他家の婦人を殺すと、被害者の最近親者は加害者の家の婦人をつけ狙うが犯人自身になんら干渉しようとなない。

以上は未開人の復讐にも種々のケースがあることを立証する実例となるが、そのどのばあいを通じて見ても犯罪者にたいする敵意は交われておらず、復讐は必ず犯罪者もしくは犯罪者になんらかの關係あるものがけて暗らされるということである。すなわち血族復讐はまず第一に犯人にたいしてあり、犯人が発見不可能のばあいに限つて血縁者にむけられるというばあいが多かった。かくてウェスターマートは「シュタインメッツ博士はただに復讐が起源的に無方向であつたという自らの仮定を裏証するに失敗したばかりでなく、この仮定は未開人の復讐についてわれわれが形づくつたすべての最もありそうな觀念と全く相反している」と批判をシュタインメッツの見解にむけたのである。未開人の復讐が無方向でないというウェスターマートは未開人の知性を認めた。しかし、かれらの知性は強力な集団の規則にたいする盲目的服従に蔽われているため個人の罪科の有無について全く無知である。かれらは個人の罪科の有無に

問題を意識するのではなく、被辱と刑罰の間のただ厳格な等量要求するだけである。「目には目を齒には齒を」ということとはかれらも心得ていた。血族復讐において類型化されている連帯責任は未開人の慣習的制裁の倫理である。がこれはたんに現存する未開人の倫理にとどまるものでなく、古代文明人のばあいにももちろん、現代の文明社会においても同じようにみられる普遍的な社会的事実であるといつていい。

ハンムラビ法典によれば家屋が倒壊して居住者に死傷を生じたばあい、その家屋の建築にあずかつた棟梁の処刑は免かれなかつた。支那において家族は単独には人間ではなく、政府の観点から最小の部分として観察され、あるいは親族縁者の園内に吞み込まれる偶有的存在でしかなかった。⁽¹²⁾ 古代メキシコでは莫切者や謀叛人が殺されたばかりでなく、子供その他の親族は四代にわたつて奴隷とされ、マケドニアの法律でも独裁者に反抗する謀叛人の親戚關係をやはり罪に連坐せしめ、アングロサクソン族の間でも父親の罪の支払いのため、ゆりかごの幼児まで奴隷にうられてゆく義務があつた。ゴーン・アレキサンダー四世は異端者の後裔を二代まで教会のすべての公職から追放し、暗型児には財産相続権を与えなかつた。フランスの中世の法律によれば自殺者の財産は没収され、十八世紀の後半においてさえ國王に反抗した犯人の全家族が追放に処せられたのである。

註

- (1) 社会学 *Sociography* という名称はシュタインメッツにより、一九一三年始めて使用された。

- (2) Westernmark, op. cit. vol. I, p. 35, 38.
 (3) A. Smith, *Theory of Moral Sentiments*, p. 113 London, 1892
 (4) D. Hartley, *Observations of Man*, 1830, 1749.
 (5) 然しこの觀察は新しいものではなく、それより百五十年も前に、ベンヤミン・リリーやダーウインは憤りについてそれが、直接の狙ひはにづいて他のもの不幸や刑罰であるにもかかわらず、しかも自己体系、動物自身の利益と関心に向うところの感情の種類であること、また種の善と利益に寄与されたものであることを指摘した。Shaftesbury, *An Inquiry concerning Virtue and Merit*, 1713.
 (6) Darwin, *The Descent of Man and Selection in relation to sex*, p. 69, 1873.
 (7) P. Menzer, *Eine Vorlesung Kants über Ethik*.
 小倉訳一六七頁
 (8) Hopkins, *Origin and Evolution of Religion*, p. 247, 1922.
 (9) Hopkins, *ibid.*, p. 246.
 (10) Granz, *History of Greenland*, i, 178.
 (11) Westernmark, op. cit. vol. p. 38.
 (12) Douglas, *Society in China*, p. 71, sqq.
 (13) 日本でも暗型児が生れるとその兄の親もしくは祖先の罪障のむくいとするいわゆる仏教の因果応報思想があつた。

七 結 語

以上は浩瀚な「道德觀念の起源と發展」を通してウェスターマーク道德社会学説の片鱗を叙述したものである。

要約すればその学説の特色は道德の起源を心理的な情動のうちに模索しながら、かかる情動を客観的に誘発し触発する条件として社会的事実 social facts を重視したところにある。いかなる未開部族においてもまたいかなる文明の尖端をゆく國民においても人間の道德的行為というものは日常の社会生活の中で学習されるものであるという人類学者の前提の重要な意義をわれわれはじゆうぶんに理解することができるであらう。

しかしウェスターマークのばあいその方法は前に指摘したようにおもに主観的心理学に低徊し、まだ社会心理学の視野に到達していなかった。いまはただシュタインメッツとの対照においてかれの学説の獨創性を評價するにとどめ、詳細な論評はこれを後日の機会にゆだねることとした。じつさい「ウェスターマークの著作は、非常に有益な記録の鉱山をなしている。とくに、呪術的儀礼、伝説、民間の信仰と慣習、総じて民俗とよばれるものについてであるが、これら記録の宝庫ほどに、社会学者に対して人間制度の相対性の感情を鼓吹したものは見あたらないであらう」(A・キュヴィリエ)。最後に紙幅の制限上、「道德觀念の起源」だけをとり上げて「發展」の問題にふれえなかつたこと、および、ウェスターマークの学説を道德觀念の起源に関して、クロボーキン、デュルケーム、ベルグソンなどの学説と対照できなかつたことを附記して擲筆する。